

ジュゼッペ・マッ
ツィーニ（一八〇
五―七二年）イタ
リアの革命的共和
派が
派の国民運動の指
導者。パリコミュ
ンとインターナシ
ヨナルを強く批判
する。バクはイタ
リア労働運動を支
援しインターナシ
ヨナルを設置する
過程で彼の思想に
鋭く対峙し好敵手
とみている。

ヨーロッパで一般に尊敬されている人があるとすれば、その活動が40年以上に亘り、この道一筋の心懸けで運動に専心してこそ尊敬に値するんだが、それはマッツイーニである。彼は今世紀最大の高潔で純粋な人の一人であるが、もし偉大さが誤謬をかたく追うことであるなら、偉大な人だと言いたいぐらいだ。

不幸なことに極く最初からイタリアの愛国的革命プログラムはその中核に虚偽の原理をもっていたから、彼の英雄的努力や天才的な計画を麻痺させ駄目にして、遅かれ早かれ彼をして反動の層へ追いやることになっていったのだ。その原理とは二元的、一形而上学と神秘の理想主義で、それが政治家の愛国的野心に接木されたものであった。それは神と聖性、それに人間の權威の秘儀であり、諸国に対し女王として君臨するイタリアの救世的運命、ローマが世界の首府であるとする、国家の威厳と光栄を求める政治的野心、従ってそれは必然的に民衆の苦勞に基礎を置くのだった。結局、その宗教は独断的、絶対的で、彼等が統一と呼び慣らしている統合への情熱は、自由の墓場でもあるのだ。

マッツイーニは宗教的、形而上学的、政治的理想主義の最後の大司教なのであって、滅びに至る者である。

マッツイーニはわれわれが神を信じないとして非難する。われわれはこれに對して、彼が信じるのを非難する。とはいえ特に彼を非難するのではなく、その信仰をたゞ歎くのみである。非常に残念に思うのは、彼の意識、活動そして人生の中に神秘的感情や理念が混入して、その為われわれに對し、一般大衆の解放の敵すべてを引率して無理にも出向うことである。

マッツイーニは若い頃、二つの対立する時流にさらされ、司祭であると同時に革命家になった。だが時が経つにつれ、司祭への渴望が、それを人が求めるように（求めたので）彼において革命家の本能を抑圧してしまった。そこで今日、彼が考え、発言し、することのすべては至極純粹に反動を示すのである。それはわが敵の陣営にとつての喜びとなり、われ等においては悲しみである。

だが悲しむだけでなく、別のなすべきことがある。わが時代は闘争の時代である。マッツイーニが手袋を投げる（決闘のしるし、訳註）なら、拾うのがわれわれの仕事だ。ある人の過去の立派な業績を尊敬するからと言って虚偽にまで頭を下げる訳にはいかない。

マッツイーニのような人を攻撃しなければならないとは、決して心のはずむことではない。つまり敬愛すると同時に闘わなければならない相手に、疑いもなく、利害を度外視し、真面目さと少なからざる情熱をもちこまねばならず、しかも彼は今世紀の墮落の中で比類なくその純粹性で輝いているからだ。しかし例え敬愛がどれ程であろうと、偶像崇拜になつてはいけぬのである。この世界で最も偉大な人にとり、大事にすべき事柄は、真実であり、正義であり、人類の聖なる大義を擁護することである。

：彼はわれわれが唯物論者で無神論者だと言う。答えようがない。われわれは事実そうなのであり、うぬぼれの感情なしで、波のようにふくれ上ると共にやがては人間社会の集團的生活の広大な海に消えて行く貧しい人間だと認めるからである。われわれはその存在を光榮とする。何故なら無神論と唯物論が真実であり、特にすべての真実の現実的な基礎で、またどのような実的な結果をも氣にとめないで、それこそ真理以外の何ものも求めようとは希まないからだ。その上、われわれは確信をもっている。どのような反対の様子や政治的慎重さ、懷疑があろうとも、真実だけが人間の実際的な善を創出するからである。

：われわれを唯物論者と呼ぶ貴方は（マッツイーニの事訳註）それですべてを言い尽したと信じておられる。貴方はそれでわれわれをきめつけ、排除したと思っておられる。だがその誤りがどこからでているものか知っているだろうか？ それはわれわれが物質（matière）と呼ぶものが貴方とわれわれの間で二箇のもの、全く違う二箇の概念であることだ。貴方の物質は貴方の神のような、悪魔のような、不死の魂のような虚構の存在である。貴方の物質は、不具な無知、活力のない野暮、不可能な存在、即ち、純粹で非物質的絶対精神のようなもの、また神学者や形而上学者の幻想の中にしか存在しないあれやこれやの創造主達である。（だが）哲学史がわれわれに明らかにしているのは、この成行きは最初極く簡單で、無意識なこの被造物は、歴史的な運命的幻滅の出生でもあり、幾世紀もの長い期間を経て、人類の啓蒙された精神に強るべき悪夢のようになつたのであつた。

最初の思想家達は当然神学者と形而上学者であつた。なぜなら地上の精神はいつでも多くの愚かしいもの、虚偽、誤謬によつて始まり、僅かな真理に到達するようになっていくからである。だからと言つて、過去の伝統的聖人達を多く推賞しはしない。私の言う最初の思想家達は、彼等の知り得た現実的な存在のすべてを受入れ、むろんそれには自己も入っていたのだが、それに彼等に現われた力、運動、生、英知等を構成するものすべてを、精神という一般の名称で呼んだのである。次いで他のものには、つまりこの抽象的作用を施したあとに残るものと彼等が考えた無定形の不活性のもの（彼等の独特な精神を現実界に無意識に施して）を物質と名付けた。それから、この物質はあの精神と同じく彼等の想像の中にしか存在せず、彼等の神である純粹精神を前にしては不活発で愚かしいものでしかなかった。

われわれとしてははっきり言つておくが、貴方の神は知らない、と同時に貴方の物質も知らない、また特にそれらがそれぞれ非一存在であつて、過去の世紀の素朴な思想家達の思索の幻影によりア・プリオリ（先験的）に創られたのを知つてゐるのだ。唯物と物質（matériel et matière）の言葉によりわれわれが理解するのは、全体、現実的存在の諸階程のすべて、有機的物体から始めて既知の

ものと未知のもの、極く單純なものから構成的なもの、また最も天才的な頭脳の機能までを含めて理解する。即ち最も美しい感情、偉大な思想、英雄的行為、献身的働き、權利と義務、自己犠牲と自己主張、マッツイーニ流の超越的神秘的錯誤まで、また有機的生の表われ、化学的特性と働き、電気、光、温度、物体の自然な引力等はわれわれの眼には差別のない進化を構成しているが、現実的存在のこの種の全体は狭義には現実的存在の全体を集約するもので、われわれはそうしたものを物質と呼ぶのである。

ここで注意したいのは、汎神論者のように、その全体を一種の絶対的実体だとか永遠の被造物とは考えないことである。そうではなくて、現実的存在の深みで生まれ死ぬという絶えざる変容によつてあらゆる無限な働きと反作用によつて、常に生成し再生産される永遠の派生物と考えるのである。

これ以上形而上的なわき道に入ることなく、要約すれば、物（matériel）と名付けるのは現に在るもの、人間の下でまた人間の外で生成するものすべてであり、理念（idéel）と名付けるものは人間の脳の働きによる所産に他ならないのだが、またわれわれの脳も全く物質でできた一箇の組織で従つてその結果による機能も諸他のものの組合わさつた活動の成果と同じく物質であり、われわれが物質または唯物界と呼ぶものは従つて何ものも排除せず、それどころか理念をも確実に包括するのである。

：マッツイーニの議論は神学者のものである。彼は言う。もし神一創造主が存在しなかつたら、優れた法をもつ世界は存在しなかつたであらう。或は恐るべき混沌を呈したかも知れない。そこでは理や聖慮によつて事物が規制されることなく、恐るべき偶然と盲目的な力の無秩序のせめぎあいがある。また生に目的がなく、すべては物質的で粗野で偶然だ。何故なら神がなければ物質界に秩序がなく、人間社会に道德律がない。そこで道德律がなければ、義務も權利もなく、犠牲と愛がなく、人間性、祖国がなく、ローマもなければイタリアもない。もしイタリアが国として存在しなければ、達

成すべき予定的世界的聖職がないことになる。そしてイタリアはその聖職を神によって与えられたのであって、諸国の女王となるべき庇護者の配慮をたどって行くと、神の導きの手やその境界線はあの予言者の天才ダンテが規定し述べたところへたどりつくのである。

次に私は反マッツイーニの所論を述べよう。

1. 創造主としての神があるなら、世界は存在し得ない。
2. もし神が自然界の立法者なら、いわれわれの理念で理解している世界というのは、物理界、人間または社会の世界である。いわれわれが自然的、物理的、社会的法と名付けるものは等しく存在し得ない。すべての政治国家は上から下へ、任意の立法家達によって隷属され支配されている。世界は最も反逆的アナキーの光景を呈する筈である。それは存在し得ない。
3. われわれ唯物論者、無神論者が認めている道徳律とは、マッツイーニまたはマッツイーニ以外の理想主義者が作るものより更に現実的なものであって、ただ単に道徳的法であるだけでなく論理的であると共に現実的、力の法、世界のすべての理想主義者の謀反に打勝たねばならない法である。というのはそれは人間社会の本質からでたもので、その基礎を神に置くのではなく、動物性に求めなければならぬのだ。
4. 神の理念はこの法の設定にあたって必須のものから程遠く、むしろさまたげと墮落になる。
5. 過去及び現在の神々のすべては、その初原の存在を、原始的な獣性の揺籃を離れて間もない人間の幻想に負うている。また超自然的聖なる世界への信仰は、人間精神のこれまでの発展に於て不可避な歴史的錯誤である。ブルードンの表現を借りるなら、人間は一種の視覚的幻影に欺かれ、神の中には自己の錯倒した恐るべき誇張した似姿しか讃仰しないのである。
6. 神性が一度天上の玉座に設置されると人間に対する懲罰となり、あらゆる暴君や悪党と同盟して大衆の収奪者、苦しめる者となるのだ。
7. 神の幻影を追払うのが人類が勝利する必須条件であり、それがプロレタリアート解放の必然的成

行きの一つになるだろう。

：今日マッツイーニは限度を踏み外している。狂信的で誠実な理想主義に鼓吹されたいつもながらの信念でもって、二つの罪を犯した。ヨーロッパの民主社会主義者の眼からみて、許しがたいのである。パリの英雄的な人びと、これ迄になかった程崇高な何十万の女・子供を含む人びとが、最も人間的な大義のために、これ迄の歴史に嘗てなかった偉大な事業である「全世界の労働者解放運動」を防御して虐殺されていた際、今日ヴェルサイユで勝利に踊り狂い祝う人びとの汚らしい反動の恐るべき弾圧の際、彼等がバリコミュインのわが兄弟姉妹達を大量に虐殺したり投獄するだけで満足せず、想像の限りの悪罵と汚辱を投げつける時、立派で純正民主主義者のマッツイーニはプロレタリアートの正義に背をむけ、予言者であり司祭である聖職を思いだすことなく、同じように中傷する方へ廻ったのである。彼はあの運動の正当性や英雄的で崇高な献身を否定するだけでなく、あの人びとがすべての人の解放に献身するのを、野卑な群集で、道徳律に無知で利己と野暮な衝動に動かされたものだと言った。

：マッツイーニは社会主義を憎む。司祭として、高い所からの救世的代理人としてそれを憎まないではいられないのだ。社会主義が道徳の観点からして、神の秘儀の恣意的な墮落に代わる人間尊重の到来だからだ。また科学的事実の点からみれば、以前は民衆の意識の中にあった偉大な原理が出発点になり、実証科学の探究や発展となり、プロレタリアートの革命的運動として宣言されたからだ。

その原理を要約すれば次の通りである。

「唯物界と呼ばれる世界においては無機物質（機械的、物理的、化学的）が有機物質（植物的、動物の、知性または頭腦的）を決定する基礎であるように、社会においてそれは唯物界の既知である最終段階と思われるが、経済問題の発展が常にまたこれからも、宗教、哲学、政治、社会等の発展を

決定する基礎であるV

この原理は科学的と道徳的たるを問わず、宗教の、形而上学の、政治や法律の理念のすべて、過去と現在のあらゆる理想主義者の確信を構成している総体を転覆するものである。それはまたルネッサンスに初まり、特に17世紀以降のもの、スコラ派の教義、社会の保嬰、絶対君主制と封建貴族をひっくり返し、いわゆる純粋理性の形而上学的教義―最後の特権階級である、とりわけブルジョワジー支配に好意的なもので取換えたもの（ブルジョワ革命のこと―訳註）より何千倍もの恐るべき革命である。

もしスコラ派の野蠻主義の転覆でさえ当時あれ程の恐るべき動乱を引き起したのであれば、人類の抑圧者や特権的収奪者の最後の拠点である教論的理想主義の転覆が、わが時代にどれほどの動乱を引き起こすものか理解できよう。

理想的信念をもった収奪者達は、最も貴重な利益が脅かされていると感じているのだ。そして亡びに至る理想主義の狂信的で誠実無私の擁護者達、マッツイーニのような人は一撃の下で、彼等の生の幻影である宗教が破壊されるのを見るだろう。

運動を始めた頃よりマッツイーニがイタリアやヨーロッパのプロレタリアートに向って繰返し言いつづけた言葉がある。その宗教的、政治的教義は要約するとこうだ。

「道徳を高めよう。神を敬し、私が神の御名によってもたらす道徳法を受入れよ。理性と信仰の婚姻（不可能だ）神の権威と人間の自由に基づく共和国の建設につき私を支援せよ。さすれば諸君は栄光と力を、更には繁栄、自由と平等を得るであろう」

これに対し社会主義はインターナショナルの口を通して人ひとに語る。

「労働者の経済的隷属が、第一原料と労働手段の独占者の手にある限り、それがあらゆる形の従属の社会的不幸、心理的墮落、政治への屈辱等―源泉になっている。

故にこの理由によって、労働者階級の経済的解放が最大の目標であり、これにおいて政治的運動は一箇の手段（un simple moyen）として従属しなければならぬ。

これこそ国際労働者協会の基本的思想を単純化した精髓なのだ。

マッツイーニはこれを憎悪する。それが彼の第二の罪であり、われわれが彼を非難するゆえんで、彼が憎悪するのは予言者であり司祭であろうとするからなのだとわれわれは理解している。

（マッツイーニへのインターナショナルの答え）

国際的同志達の革命組織のプログラムと目的

1. この組織の原則は「民主的社会主義者国際同盟」のプログラムと同じである。それはロシア社会民主プログラムで明示した女性と宗教的法律的家族関係及び国家についての諸問題を更に明瞭にするものである。

中央事務局は近い将来、更なる理論的実務的補足を作るよう期待する。

2. 国際的同志同盟は全体革命―社会的、思想的、経済及び政治の即時の革命―を擁護する。それ故、現秩序は財産と収奪、宗教的、形而上学的、ブルジョワ教義の独占と原理に基づき、またジャコバン党の革命的権威に基づくものであるから、（今後は）先づヨーロッパで次いで世界の各地でどの一つも存立し得ないものとする。労働者に平和を、被抑圧者に自由を、あらゆる支配者、収奪者、監督者をやっつける！との呼びかけに対し、われわれはすべての国家と教会を、それに付随するすべての制度、及びその宗教的、法律的、財政的諸機関、警察と大学、経済的社会的法の破壊を意図する。かくて現在騙され、奴隷とされ、苦しめ搾取されている何百万もの人ひとを、その公的また官僚的指

一八七二年三月一日
二日バクは手帳に
書いたハマツツイーニが昨日死んだ
日曜日、ピサーで
一〇時三十分だV
よき敵手を失った
悲しみだらう。

このプログラムは
一八六八年にバク
が書いた。「民主
的社会主義者国際
同盟」は一八六八
年七月二五日「平
和と自由連盟」の
ベルン会議より少
数者の秘密組織と
してバクが創設し
た。

導や庇護から開放し、集団や個人として遂に全的自由において生息せしめるのである。

3. 個人的社会的悪は個人からであるよりも組織や社会的地位からであるものだと確信により、われわれは正義の感覚や有用性の打算を度外視して、人間的に行動する。そこで革命を危険にさらさない限り、人間を許し、地位と事物を容赦なく破壊する。われわれは自由意志と社会の申し立てによる処罰権を否認する。広義には最も人間的な感覚である正義も一個の観念でしかなく、否定的で過渡的なものと名辞されよう。正義は社会問題を提起するが説明せず、人間解放―平等における自由によっての社会の人間化―の一つの道を示すにしか過ぎない。積極的な解決は社会の理性的な組織化を増殖することのできるのだ。この永年の待ちつづけた解決法こそ、われ等の共通の理想であり、それはすべての人の連帯―人類の同志化による自由、道徳、友愛に外ならない。

すべての個人は、彼が生まれ育った自然と社会環境の不作為の所産であり、それらが彼に影響しつづける。すべての人間的不道徳の三大原因は、不平等―政治的と同時に経済的社会的なもの―、無知―その自然な結果として―、及び当然な成行きとしての―隷属である。

社会組織が常に人の犯す犯罪の唯一の原因であるから、犯罪人を処罰するのは明らかに偽善的で不条理である。また処罰は有罪を予定して居り、犯罪者は決して有罪ではないのである。有罪と処罰の理論は神学から出て居り、これは不条理が宗教的偽善と婚姻したものである。

現在の過渡的状态での社会に付される只一つの権利は、それ（社会）が産みだした犯罪人を殺害する自然的権利であり、これは社会の防衛の為であり、彼等を裁判にかけたり宣告を下す権利はないのである。この権利は言葉の厳密な意味での権利どころか、自然の事実でしかなく、現在の社会の無能さと愚かしさの傷むべきしかし必然の象徴であり所産である。そこで社会がその実施を避ければ避ける程、社会の本当の解放に更に近づくのである。すべての革命者は現に流布している社会組織の被抑圧者であり、苦しむ犠牲者であるから、その心は当然復しゅうと憎悪に燃えているだろうが、覚えておくべきは、王やあらゆる種類の抑圧者及び収奪者も大衆の中から現われる犯罪者と同じく有罪だと

いうことである。彼等は悪の実行者である。しかし彼等は有罪ではない、なぜなら彼等もまた一般の犯罪者と同じく、社会の現組織の不作為の所産だからである。もし民衆が反乱の最初の火花にあたって彼等を殺害したとしても、決して驚くにあたらない。それはやむを得ない不祥事であり、嵐が引き起こす災害のように無益である。

しかしこの種の出来事は道徳的でもなければ有益でもない。歴史はその方面の教訓でいっぱいである。一七九三年の恐怖のギロチンはむだでぐずぐずしていたとは決して非難できないが、それでもフランスの貴族を一掃できなかった。一掃どころか、この階級はギロチンによってではなく、持物の没収と売りに出されることで震えあがったのだ。そこで一般的に言えば、政治的虐殺は何らかの党派をまっ殺することはできず、それ所か重要な点では特権階級に対して無力なのを証明している。なぜなら、権力は人間から出るよりも組織によって特権者に与えられる地位から出るのである。別言すれば国家の制度とその副産物でしかもその自然な基礎である個人的所有から生まれるのだ。

ラジカルな革命を実施するには、それ故、地位と事物また財産と国家の破壊が必要だが、人間を破壊する必要はないのである。さような事をすれば、必然的に反動をわれわれに対し招来するし、あらゆる社会で人間の虐殺が間違いない生じるのである。

けれども人間に対し人間的態度を執る権利を獲得するには、地位と事物に対しては容赦なくする必要がある。すべてを破壊するのだ、そして先づ何よりも財産とその寢床を共にする国家を破壊するのだ。これが革命の秘密である。

ジャコバン党やブランキストが、信念からより必要に迫られて社会主義者になったとて驚くにあたらない。彼等には社会主義は革命の目的でなく手段なのだ。そこで究極の到達点は独裁であり、その意味は中央集権国家である。それこそ財産（制）の再編成による必然の結果なので、われわれから言わせれば、彼等が人間に対する流血革命を熱望し、事物に対するラジカルな革命をしかける意図が全くないことから来る自然な成行きである。しかしこの流血革命の必然の結果は、高度に中央集権化し

た革命国家の建設に基礎を置くから、次に証明するように、新しい主人の許での軍事独裁になるのだ。だからジャコバン党やブランキストの勝利は革命の死になるのである。

4. われわれはさような革命家達―未来の独裁者達、組織者、管理者―に対する当然な敵である。あの人達は今日の君主制、貴族制、ブルジョワ制国家を破壊した後でも新革命国家を希望している。当然われわれには熟知の中央集権者、独裁者としてであるが、あの人達は権威に拠って上から創出する秩序に慣れているので、無秩序（これは実際には民衆の生活の率直で自然な表現に外ならない）をみて恐怖する。そこで例え革命が作りだす極く健全な無秩序でも、それと見れば名目だけは革命的な何らかの権威、しかも実際には新しい反動に過ぎぬもので、その効果は再び民衆を布告によって支配し、服従させ停滞と死に追いやるもの、別言すれば新しいいゆる革命貴族制の手で奴隷化し収奪するに過ぎないので介入し、民衆の動きを停止させ抑圧するのだ。

5. われわれが革命として理解するのは、いわゆる危険な情熱の解放であり、専門用語で「公序」というものの破壊である。

われわれはアナキーを恐れない。それどころか呼びだすのだ。というのはアナキーこそ民衆生活の束縛のない完全な肯定で、自由、平等、正義、新秩序及び革命と反動との衝突を招来させるのである。この新生活―民衆革命―は多分組織化も遅くはないだろう、しかもそれは革命的組織を下から上へ、周辺から内部へ向け自由の原則に従って創出するのであって、決して上から下へ、中心から外周へ、あらゆる権威的やり方になら行かない。その差異はわれわれにとって貴重なもので、つまり権威がそれ自体で教会になったり、君主制、立憲制国家や時に革命的独裁制にすら成るのだから。だがわれわれはそれらすべてが等しく搾取と専制の終りなき源泉だとして嫌い否定するのである。

6. われわれが理解したように、革命は先づ国家と国家諸制度のラジカルなまた全体的破壊から始めなければならない。この破壊の当然で必然の結果は、(a) 国家の破壊、(b) 個人的負債の支払に關する

国家介入の停止、支払うか支払わないかは債務者の判断に任せられること。(c) 直接税間接税とを問わず、すべての税金の支払及び税引上げの停止、(d) 軍隊、行政、官僚制、警察及び司祭制の解体、(e) 裁判の廃止、権利として衆知のあらゆる司法権及びその執行権の停止、要するにすべての土地所有権証明書、遺言状、譲渡及び遺贈書、法的権利書、別言するとすべての刑法的民法的赤紙の廃止と焼却である。革命の実際は国家によって法が創設し保証するものを取換え、(f) すべての生産資本と生産手段を「労働者」組合に移管し、組合がそれらを集約的に活用する。(g) すべての教会と国家の財産は個人の貴金屬と共に、すべての労働者組合の連合同盟に移管する。この同盟はコミューンを成すものである。

移管された物品に対するお返しとして、コミューンは被搾取者に彼等が自己の労働で稼ぎまた稼ぐ意志がある限り、最低の必需品を給付する。(h) コミューンはバリケード（地区に当るもか：訳註）如の常設連合及び各バリケードから選出された一ないし二名の代表者は一街区または地区に就き一名とし、全員出席による集会での責任あるまた適時解任され得る代表であるから成る革命的コミューン委員会によって組織される。かように創出された革命委員会は、その成員の中から実行委員会を選出する権限をもち、実行委員はコミューンの革命的施政の各分野に宛て一名とする。(i) 蜂起してコミューン的に組織された首都は、権威的で拘束的な国家は破壊することを宣言しなければならぬ。それが当然な権利として行すべきことで、嘗ては他のすべての地方と等しく隷属してきたのだからむしろ、地方を支配し、介入するすべての権利を放棄しなければならない。* (k) すべての地方、コミューン、組合等に訴え、首都によって示す例示に従うよう招待すること。それは先づ革命的路線によって再編成され、次いで同意した集会所に代表を派遣する。この代表者達は、同じ原則の下に連合する蜂起組合、コミューン、地方に対し、また反動防衛に有力な革命軍に対する代表と同じ資格をもつ者である。革命的宣伝者達は何らかの公的標識をもった革命使節ではないが、その者をすべての地方とコミューンに派遣する。特に農民達の間に送らなければならない。というのは農民は原則や何らかの

独裁的布告によって革命者になるのではなく、只革命的事実によってのみ影響を受けるからである。そして革命の事実は各コミューン内に於て、国家の司法的公的生命の完全な停止により始めて生まれるのだ。国民国家の廃止は次の意味がある。すべての外地、地方、コミューン、個人を問わず、同じ原則の名目で反逆する者は、諸国家の現実的国境やその人びとの異なる政治的所属団体及び国民的体制にかかわらず革命の連合に受入れられる。他方反動に加担する地方、コミューン、組合及び諸個人は除外される。そこで蜂起地域における自衛の目的に宛て、革命の拡大と組織化が現実となり、国境の廃止と諸国家の失墜に基づいて革命の勝利が訪れよう。

7. 政治革命が社会革命に寛容しない限り、また民族革命が厳密にその急進的社会主义者の革命、反国家の性質をもたない限り、政治革命または民族革命として成功せず、従って普遍的革命にならないであろう。

8. 各地の革命は民衆によって創出される。また最高の管理は常に、農業と工業の諸組合の自由な連合に組織された民衆によって行われ、この新革命国家は、下から上へ、同じ原則の名目によってすべての蜂起地域を包括し、革命的代表制によって組織化される。そこで古い国境や国民的差異は無視するが、公共サービスを実施するのであって、民衆を支配するものではない。それは新しい母国、すべての反動の同盟に対し全体革命の同盟 (the Alliance of Universal Revolution) となるものである。

9. この組織は独裁及び拘束的管理の理念をすべて排除する。しかし革命的同盟の設定と反動に対する勝利のため、革命思想と活動の統一は民衆的アナキーの厚い層に働き手をつねなければならぬ。民衆的アナキーこそ革命の生であり活力である。またその働き手が国際的同志達の秘密同盟である。

10. この同盟は、革命は決して諸個人や秘密結社によって行われるものではないとの信念から出発している。革命はそれ自体で招来され、事物の力、事柄と実際の潮流によって作りだされるのだ。そ

れは一般大衆の本能的意識の深みに長く発酵し、次いで表面的には至極つまらぬ原因が引き金となって、爆発する。良く組織された秘密結社は先づ大衆の本能に見合った理念の種をまいて、革命の出生を助け、次いで組織化し、革命軍ではなく一軍は単に民衆でなければならぬ。そうではなくて一種の革命的職員―彼等は献身的で厳しい仕事のできる知的人びとで、先づ何よりも民衆の誠実な友であり、野心や見栄がなく、革命的理念と民衆の本能との間の仲介者として活動できなければならぬ。

11. それ故、さような人びとは広大な数はいらぬのだ。百人の強力で誠実な革命者が同盟すれば全ヨーロッパの国際的組織として十分である。一国組織であれば二・三百人の革命者で十分である。

(民主的社会主义者同盟と国際労働者協会)

ロシア革命

本文はセルゲイ・ネチャーエフへの手紙一八七〇年六月二日ロカルノ発信より採用。

セルゲイ・ネチャーエフ(一八四七―八二年)ロシア革命家、首都の学生運動で頭角を現わし、後学生イワノフ殺しがドストエフスキーの「悪霊」に脚色されネチャーエビズムとして知られている。

私はロシアに就いて考察してみよう。ロシア革命は何時はじまるだろうか？ 誰も知らない。多くの人びとは、その中でも私は罪人の一人だが、一八七〇年に民衆蜂起を期待した。だが民衆は起たなかった。それでロシア民衆は革命なしでやって行けるだろうか、革命は彼等を素通りするのだろうか？ 否だ。この結論は不可能だし無意味である。誰だってわが民衆の絶望的また実に危機的政治・経済状況は知っているし、他方わが政府と国家の絶対的無能力、それを少しも緩和できず、その無能力がわが政府内の個人のあれこれの特長からでたものでなく、実に政府構造の本質によるもので、特にわが政府にはなほだしく、当然ロシア民衆革命は避け難いのは知っているのだ。それは消極的だけでなく積極的にも必然で、わが民衆はその無知にもかかわらず、意識的無意識的に達成するよう努めなければならぬ理想へ歴史的に到達したのである。この理想は国家の抑圧と強奪から自由な土地の共有権である。民衆は偽ドミトリス、ステン・カラージン、プガチョフの下でそれを達成したし、不断の暴動を手段として今だに試みているが、いつでも蹴散らされ、常に屈服されている。

ネチャーエフの
『革命家の教理問答』
(一八六九年)
通常この文書はバ
グとの合作とされ
ているがバグはそ
れに批判的であっ
たのが明らかであ
る。

私はロシア民衆の理想の特長な2点を指摘したが、それは僅かな言葉で完全に記述できるとはしない。けれど人はロシア民衆の知的熱望において他に何があるか、最初の革命が陽の目をみた時、何が出て来るか判らないのだ。私にとって目下のところ証明できるのは、わが国は何らかの秘密結社が好きなことを書き込む例え^キのコミンニストプログラムのようなもの1白紙ではないことである。部分的には意識的に、多分その34ぐらいは無意識的に民衆自身でプログラムを実施しているから、秘密結社が成功したければ、それに適応しなければならぬのだ。

議論の余地なく、衆知のことは、ステン・カラージンの下でもブガチョフの下でも、いつだって民衆蜂起はしばらくは成功したし、彼等は只一つのことしかやっていない。それは土地全部を共有化し、地主達、皇帝の政府役人、時には司祭達さえ追い出して、自分達の自由コミニンを組織するのだった。これはわが民衆が一つの貴重な要素をその理想として記憶の中に保持しつつづけていること、またそれは西欧の民衆の持っていないもので、それこそ自由な経済共同体を意味するのである。わが民衆の生活と思想の中には、2個の原理、われわれが作り上げて行くべき2個の事実がある。不断の暴動と自由な経済共同体だ。更に第3の原理、第3の事実としてはコサック及び強盗と泥棒の世界だ。これは国家及び家父長制社会による抑圧に抗議し、言うならば先の2特長をも合体している。

不断の暴動、それらは偶発的条件でいつも引き起こされているが、それでも普遍的原因から生じ、また民衆の深く一般的な不満を表明しているのだ。それらはある意味で、ロシア民衆生活の日常性でありおきまりの現象である。

ロシアではどの農村でも状況に不満で、貧乏と人口過剰と抑圧を経験し、その集団的心情の深みにあるものを隠そうとはしない。それは地主の持物の土地更に豊かな農民(Kulaks)の土地をことごとく押さえようとする熱望で、またそれが疑いのない権利だとする確信である。だから技術をもってすればどの農村でも反抗するのだ。反抗しない農村があるとすれば恐怖や自己の弱さを知っているからなのだ。この知覚は農村コミニンの不統一、彼等の間での本当の連帯がないことによるのである。

もしそれぞれの農村が、何処かが起れば他も起つのだと知ればロシアで反抗に起ちあがらない農村はないだろう。そこで秘密組織の第一の義務、目標と目的はすべての農村コミニンに彼等の必然的な連帯の実現を自覚させ、ロシア民衆に自己の力を自覚させることである。別言すれば農民個々の反抗を全人民の反抗に組合わせるのだ。

ベグニー教徒は十八世紀後半に現われたオーソドックス(正教)の一派税金や軍役を拒否し地上は反キリストが支配していると考え、ロシアの辺境で生活していた。

くだらぬ話家達
ロシア亡命者ウチ
ンを始めマルキ
ス達ハ革命問題
についてのハ
革命問題
書Vにもれた強
盗の革命をルン
パ蜂起説として
批判中傷したこ
を指す。

この目的を達成する主要な手段の一つだと私が深く確信しているのは、わが自由コサック団、わが無数の宗教者達、またそれ程宗教的ではない浮浪者達、巡礼者、^キベグニー教徒達、泥棒及び強盗である。この広範で数の多い地下の世界は、記憶しがたい昔から国家及び国家主義、それに鞭のチユートン文明に反抗してきた。これがあの無署名の広翰な書きものハ革命的問題についての声明書Vに述べられているのであつて、あれは行動の代りにビザンチン風の教論的お喋舌を好むくだらぬ話家達^キすべからず憤激を買ったのである。しかしこれは全く正しいことで、わが歴史によって確証されているのだ。コサックや泥棒、強盗と浮浪者の世界こそステン・カラージンやブガチョフの下での個別な反抗を統合し触媒の働きをしてきた。巡回し友愛をあたためるのが民衆革命の最良で信頼できる案内者で民衆の不安をかきたて、民衆の反抗の前駆者になるのだ。あの浮浪者達が機会さえあれば、泥棒や強盗にたやすく成り変わるのを知らない人がいるだろうか？ 事実、ロシアではわれわれの中に強盗や泥棒がいるのではないだろうか？ それ政府ではないのか？ それわが官吏や私的投機家、買収者^キではないだろうか？ 地主や商人ではないだろうか？ 私個人に就いていえば、強盗や盗みは我慢できない、その他反人間的暴力はなおさらである。しかし告白するが、王座を占め特権を享有する強盗や盗みと一般の強盗や盗みのどちらを選ぶかとなれば、ちゅうちょなく後者に加担する。私はそれが自然で必要でまたある意味では合法だと認めるのだ。告白すれば、強盗の民衆的世界は本当の人間の観点からして美しいものからへだたてはいるだろう。しかしロシアで何が美しいのだろうか？ わが尊敬すべき公的または文明化したブルジョワジーや上品な世界以上に汚いものが他にあるだろうか、あれはその滑めらかな西欧の様式の下に最も恐るべき無思想があり、感情や関係それに行動を奪われ

ニコライ・ウチン
(一八四一—一八三
年)ロシアのラジ
カル、インターナ
ショナルロシア支
部代表、マルクス
にバクの資料を送
りインターナシ
ナルからバクの追
放に役を買ひ、
後政治活動をやめ
ロシアへ帰った。

良くても歎びのなさを通れようのない空虚を隠し持っているのだ。しかし他方、民衆の墮落は自然で強力で決定的である。何世紀にも亘る犠牲によって、民衆は当然そうなったのだ。だがすべての墮落の根源に向け、また国家に対し強力に抗議する所に未来への種子が含まれている。それ故私は民衆的強盗の側に加担し、それが未来の民衆革命にとって最重要な道具の一つだと認めるのだ。

こんなことを言えば、わが実直なまた実直でもない理想家達！それはウティン君やロパティン君のような人びと、彼等は自分達の理念、意志、行動様式を人工的な秘密組織により民衆に押しつけることができると思っているんだ！ああいう膺合いのすべての理想家が反撥するのは理解している。だが私はこの万能性を確信しているし、破壊がどの方面から来るにしても、全ロシアが一度破壊されたら民衆はウティン、或はきみの理想のために起ちあがるのではなく、彼等自身のためにこそ決起するのであって、そうしなければどんな人工的謀反勢力もあの素朴な運動を抱きこんだり、改変することはできないのだ。つまりどんなダムでも逆まき溢れだす水をせきとめることはできないのだ。きみ達、私の友人達だって、民衆の流れを泳ぎ切れなければ、木屑のように吹き飛ばされるのだ。私はそこに民衆の初めての大きな反逆、浮浪者と泥棒と強盗の世界！われわれの世界に確固として根を張り、しかも重要な表われの一つを構成しているものが動きだし、しかも決して弱いものではなく、強力に動きだすのを信じている。

それが良くとも悪くとも、それこそ議論の余地なく必然の事実であって、本当にロシア民衆革命を望む人なら、奉仕したく、助けたく、関係したく、紙の上でなく行為においてそうならば、この事を知っておかねばならない。その上、この事実を受入れ、決して避けてはいけないのだ。その人はそれと自覚的實際的關係をもち、革命の勝利へ向けてそれを強力な武器にしなければならぬ。それ（強盗の世界！訳註）について、入念になる必要はない。自分の理念や純潔な純粋性を保ちたい人は書齋に閉じこもるなり、夢みたり、考えたり、討論や詩を書くがいい。だがロシアで本当の革命家になりたければ、手袋を脱ぐべきだ。全ロシアを深く覆っている泥は手袋ぐらゐで身を救ってはくれない。

ロシア人の世界は特権階級と民衆とを問わず、恐るべき世界である。ロシア革命は実に恐るべき革命となるだろう。恐怖や汚れを嫌がる人はこの世界や革命に背を向けるだろう。ただ革命に尽そうとする人は直面しても神経を強くもち、何事に対しても準備しておかねばならない。

強盗の世界を民衆革命の武器に活用するのは、個々の民衆的反逆の触媒とするのは容易ではない。私はその必要性を認めるが、同時に自分ではその仕事に対する能力の欠如を思い知らされている。それを実施し、結論にまでもち込むには、強靱な神経と巨人の力と狂熱の信念それに鋼鉄の意志で武装しなければならぬ。きみはそういう人達をきみの仲間につけるべきだ。だが私の世代や私達の育ちでは出来ない事なんだ。強盗の仲間に入るといふのは全く彼等のうちの一人に成るとか不安定な感情、不運、多くの無知な目的、感性や行動を共にすることではない。そうではなくて、彼等に新しい魂を与え、彼等の裡に全く新鮮な本当に民衆的な目標を呼び醒ますことである。あの粗野で残酷で粗暴な人びとは、新鮮で強力なまだ使い古していない気質が生きいきとした啓蒙を待ち希んでいる。ただしその啓蒙は現実的であって決して説教じみたものでないものだけが、彼等に届くのだ。この課題についてはわれわれの手紙のやりとりのできる限り話そう。

ロシア民衆の未来生活において、もう一つの貴重な要素は、前に指摘したように、自由なコミューンで、これは西欧にない実に貴重な要素である。西欧の社会革命は、すべての未来組織における必要にして基本的なこの胎児（自由コミューンの事！訳註）を創出して行かねばならず、その創出こそ西欧では多くの騒ぎの基になるだろう。ところがロシアでは既に創出されているのだ。もしロシアで革命が起きるなら、そして国家がその官僚と共に崩壊するなら、ロシアの農民はその日に何のさしさわりもなく、自分で組織を作りだすだろう。だがロシアはそこで別な困難に直面する。それも西欧にはないものだ。わがコミューンは恐ろしい程分散して居、ほとんどお互いに知ることなく、ロシアの習性としてしばしばお互いに敵対している。最近政府の財政的手続きのお蔭でそれらが一つの地区（Volosti）に統合され、その地区は発展的に幾らか民衆的に知りあい内容を獲得しつつあるが、そ

れだけである。この地区はそれでもお互いに知り合おうとはしていない。革命を成功させるには、未
来の民衆的自由を組織化するには、あの地区をそれら自身の民衆的意向によって更に大きな統合地区
(Ueddy) にそれから地方 (Oblasti) へ統合すべきだ。地区は自由なロシア連合を創設するのであ
る。

わがコミューンにこの必要性を眼覚めさせるには、それこそ彼等の自由と利益の為なのだ。再び
それが秘密組織の仕事になるだろう。というのは国家と特権階級の利益に全く反する仕事をやろうと
する人は他にいないからだ。だがここはそれにどう接近するかとか、この救いに至る自覚、唯一の約
束された救いをどのようにまた何によってコミューンの中に眼覚めさせるかを記述する場ではない。
親しい友よ、ロシア民衆革命に宛てたプログラムの主要路線は、民衆の本能に深く根ざしているの
であって、わが民衆の全状況に基づいているのだ。民衆運動の先頭に立ちたい人は、それを全的に抱
擁して活用しなければならない。民衆に自分のプログラムを押付ける人は幼児を抱いたまゝ取残され
るだけだ。(だが) 民衆は無知でばらばらでプログラムは作れないし、体系化して、プログラムによ
り団結できない。だから助ける人が必要なのだ。どこに助け人がみつけれられるか? これこそ革命で
の最もむづかしい問題である。西欧では大体、今日迄革命の助け人は特権階級から出ていた。だから
いつもまた収奪者に成り下ったのだ。この点でもロシアは西欧より幸運だ。ロシアでは教育を受けた
多くの人が知的でありながら同時に地位がなく、出世もできず、自分達の問題が解けないでいる。現
在勉強している若者の少くとも3/4はそういう状態だし、彼等の出自は神学生や農民の子供、プチブ
ルの子、下級官吏と没落貴族の息子達である。これについて言及するのは、私よりきみの方がよく知
っている筈だ。もし民衆を一箇の革命軍とみるなら、彼等こそ要員 (general staff) であり、秘密
組織へ宛てる貴重な人材である。

：どうすればこの世界がもっと道徳的になるだろうか? それにはその世界内で民衆と全人類の解放

に向けての理性と感情を強化し、率直さと自覚を喚起することである。それこそ新しい唯一の宗教
とも言うべきもので多くの魂を動かせ、救済の集団勢力を創出する力をもつものである。今後はこれ
がわれわれの宣伝の重要な内容にならなければならない。その直接の目標は秘密組織の創出であり、
その組織は直ちにまた同時に民衆の補助勢力を作り出し、全成員に対する道徳教育のための実務学校
になるべきである。

まづこの組織の目標、意味それに目的を更に厳密にしてみよう。私が先に何度も指摘したように、
私の方式では革命軍を作るのではない。革命軍としては民衆で十分だ。組織はこの軍の要員 (スタッ
フ) であるべきで、民衆勢力の組織者―組織自体のためのものではなく民衆の本能と革命思想の仲介
者になるのだ。革命の理念は、歴史の結果として、民衆の本能を表現し代表する限りにおいて革命的
で、活力があり、現実的で本当のものである。民衆にきみ自身の考えを押しつけようと努めるなら、
それは民衆の本能とは異質のものだから、新しい国家に役立てようとの意志を応用する訳だ。だか
ら民衆生活の解放だけを真剣に希求する組織は出来る限り民衆の要求を表現するプログラムを採用し
なければならぬ。私には人民衆の大義 (Narodnoe Delo) の第一号で発表したプログラムがよく
この目的に答えているように思う。民衆に新しい規制や命令、生活様式を設定してはいけない。た
ゞ民衆の意志を解放し、その自己決定と社会的経済的組織に広い場を提供するのだ。そうすれば組織
は上からではなく下から創出されるに違いない。わが組織はこの理念を真面目に受け入れ召使いや助
け人になるだけで、決して民衆の命令者や何か支配するための口実を設けて、例えばそれが民衆の福祉
に役立つという口実でも付けてはいけないのだ。

わが組織は巨大な仕事に直面している。宣伝や民力の団結によって民衆革命の成功を準備するだけ
でなく、またこの革命勢力によって、現存する経済的社会的政治的秩序を全的に破壊するだけでなく
革命の成功の暁には、民衆の上に振られる何らかの国権の設定は不可能にすること、例えば最も革命的
な権力であろうと、きみの権力だって設定してはいけない。何故なら権力が何と自称しようと、当然

それは民衆を新しい形式によって古い隷属に付すからである。それ故わが組織は、民衆の最初の勝利を切り抜けるだけの力強さと活力がなければならぬ。これは決して単純な問題ではないのだ。わが組織は深くその原則に習熟し、革命の最中においてもその思想や性格、方向性を変えないのが望ましい。

ではその方向性とは何だろうか？ わが組織の目的と仕事は何だろうか？ 例え一時的なまたは過渡期的権力によるにせよ、その介入を要することなく、即ち何らかの国家の調停なくして、完全に広範な人間的自由に基づく、自由決定ができるよう民衆を支援することである。

われわれは公権力の敵しい敵手だ。われわれは公認の独裁権に対する敵手だ。われわれは社会革命のアナキストである。きみは訊ねるかも知れない。もしアナキストならどんな権利によって、またどんな方法でわれわれは民衆に影響するのか？ 権力を拒否すれば、どんな力でまたむしろどんな強制力を使って民衆革命を進めるのか？ 八眼にみえない力だ！ 誰にも見えず、誰によっても設定されない力！ わが組織の集団的指揮権（the collective dictatorship）によって組織がより強力になればなる程、それは不可視で確認されない、そして更に何らの公的正当性や意味をもつことなく存在するものとなる。

：例えばきみがロシアにおける自然発生的革命の成功のさなかに身を置いたと考えてみよう。国家とその社会的秩序が崩壊したのだ。民衆は蜂起する、そして必要なものすべてを掌握し、抑圧者を駆逐する。法律も権力も最早存在しない。嵐の湖がすべてのダムを決壊させたのだ。これは決して同質ではなく、それどころか多種多様の大衆が！ つまりロシア民衆がロシア帝国の広大な地域に溢れることだ。民衆が生き始め、現にあるがまゝの姿で活動したのだ。そこで命令されて存在するのではなく、至る所それ自体のやり方で動く！ それが一般的なアナキード。民衆の中に蓄積されてきた膨大な量の泥が動き出し、表面に浮びあがって来る。各地で多くの新しい、勇敢な、賢くして無遠慮な野心に燃

える人びとが、むしろ自分の遣り方で民衆の信頼を得て、民衆を自分の利益になるよう動かせようとする。そういう人びとが衝突し、闘争してお互いに殺し合う。これは恐ろしく絶望的なアナキード。だが想像して見給え、この全般的なアナキードの最中に、帝国の領土の各地に小グループで会員を分散していた一箇の秘密組織が、周囲の事情にもかかわらず確固として団結しているのだ。共通の理念と目的によって鼓吹され、しかもそれを至る所で活用するのだ。むしろ各地の条件によって修正されるが！ 即ち一箇の組織が至る所で共通のプランに従って活動するのだ。これらの小グループは誰もそうしたものがあるとは知らない、何ら公的に認知された権力を有せず、しかも自分達の理念において強力で、その理念とは、民衆の本能、熱望、要求の本質そのものを表現するもので、しかも目的や計画もなく闘争する大衆の中で自分達の明瞭な覚知した目標によって強固なのだ。最後に、この人達はいまいな諸グループを一個の有機的な全体に結び合わせる連帯において強力である。彼等会員の知性と活力は自分達の周囲に一群の人びとを創出し、しかもその人達は多かれ少かれ同じ理念に献身し、また当然自分達もその影響下に從って行動する。そうしたグループは民衆運動を自分達の特権、名譽または権力にあてて動かすのではなく、野心的でそのため内部闘争をする人びとはすべて除外されてるので、たゞ民衆運動を社会的経済理想の最大の実現に向け、また民衆の完全な自由の組織化にあてて動かすのである。これこそ私が秘密組織の集団的指導性（the collective dictatorship）と呼ぶものである。

この指導性はあらゆる私的利益、虚栄、野心から離れている。というのはそれは無名で、不可視で、何らの有利さ、名譽、または権力の公認をグループの会員や諸グループそのものに与えるのではないからである。それは民衆の自由を脅かさない、なぜなら公的性格がないからだ。それは国家権力のやうに民衆の上に設定されない。なぜならその全体の目的は計画によって規定されるので、しかもその内実は民衆の自由の完全な実現にあるからだ。

この指導性は民衆の自由な発展と自決に背馳しない。即ちその組織は民衆の慣習と本能に適應した

下からのもので、民衆への働きかけは、何らの権力をもたない会員の自然な個人的影響力によるだけで、それらが各地区、地域、地方、農村共同体に網の目のように張りめぐらされて居、各人は自分の持場で他の人びとの同意を得て民衆の自然発生的革命運動を前もって完全に同意を受け規定された全般の計画に向け方向づけるのである。民衆の自由のための組織にむけたこの計画は、まずその主要な原則と目標に関して確固として明瞭に輪郭づけてあり、さようにしてその実現に参加を求める会員による何らかの誤解や偏向性が起きないようにして置かねばならない。第2に、条件の差異によるやむを得ない変更、地方生活の多様性から来る各種の運動をすべて抱擁するだけの広さと人間性をもっていなければならない。

こうして現下の問題は、われわれの知っている分子からどのように組織化をすすめるか、この秘密の指導性と力にどのように到達するかである。そしてこれは先づ現状では広範な宣伝を流布し、その宣伝は民衆の中に現・実・的に入って行けるもので、またこの宣伝力と民衆自身の中での組織によって、民衆の分断している力を一個の強力な力、国家を打破する力に結合することである。そして第2に、その団結は革命の最中においても分裂したり、民衆の自由の暁においてもその方向性を変えることがないものでなければならぬ。

この組織は、特にその基本的中核は最も決意の固い、最も知的で、できるだけ知識のある、つまり経験による知性の豊かな人びとで構成されるべきだ。この人達は、熱烈で決して偏向することなく、できる限り個人的な利害から離れ、生命はむしろ死さえも恐れず、また誰でもひかれる物質的快適さや喜び、野心と地位それに名誉から離れていなければならない。この人達は全的にまた完全に一つの情熱——民衆の自由（の擁護）によって浸透されていなければならない。彼等は生きている時もその死後においても歴史に名をとどめるような、個人的歴史的重要性を捨てなければならぬ。

（S・ネチャーエフへの手紙）

エリゼ・ルクリュへの手紙

1875年2月15日

：革命は目下のところ眠りに入ったようです。われわれは進化の時期に再び落込んだ訳だ。その意味は、地下にもぐった革命は最早眼に見えず知覚されないということです。：革命の季節は過ぎてしまった。それはわれわれが目撃してきた恐ろしい不幸や多かれ少かれ罪深い犠牲者であった悲しい災厄によるのではなく、むしろ大きな絶望によるもので、私がいつも言明していたように、革命思想、希望、それに情熱が大衆の中に全く認められなくなったのが理由です。そしてそうしたものがなくなつた今は壁にむかつて闘いをいどむようなもので、何も出きはしないのです。

：不幸な人類よ、このゴミ捨て場から出るには、巨大な社会革命によるしかないのは明白です。ではどうやって、人類はその革命をやるのでしょうか？ 今日程、ヨーロッパの国際的運動が民衆運動に恐ろしいほど防備したことはなかった。反動は諸国の軍人に組織的であるよう教え新らしい科学でもって民衆を抑圧している。この堅固な要塞をわれわれはどう攻撃すればいいのだろうか？ 大衆は組織離れしているのです。ではどう大衆を組織するか、大衆が自己の栄光のために十分な情熱をもつのは何時だろうか、何時になったら意欲を燃やすようになり、自己を救うのだと決意するのだろうか？ 宣伝の他はないでしょう。：それが大切なのは判るが多くの期待できまい。別な希望に依るとすればそれは大戦でしかないでしょう。巨大化した軍事国家は遅かれ早かれお互いに殺りくしあい共喰いを始めるだろう。しかしこれは何んという予想だろうか？

（バクーニン晩年の悲観的な観測だ。彼は革命についてハ妊娠2ヶ月を9ヶ月に見誤るヘルツェンと評されたが、民衆が革命を妊娠していることの誤診はなかったのであり、ヨーロッパの軍事諸国が小規模の紛争を繰返しつつ第一次欧州大戦からロシア革命に至った歴史の発展過程は十分に透視していたのである）

ハバクーニンの伝言Ⅴ 終